



八 ぼち、墓地、行こか？

「今日から、追加で階段登りをするぞ」荒き先輩が突然立ち止まった。夏休みが終わり、学校が始まって、初めての練習。いつものアスファルトの坂道を切り切り、帰り道の途中だった。

「ここはお墓じゃないですか」市民病院から峰山の展望台までの坂道沿いには墓地が整備されている。

「お墓じゃない。階段だ」

「お墓の中を走ってもいいんですか？」

「お墓の中は走らないぞ。お墓につながる階段を駆け登るだけだ。まあ、通路みたいなものだ」

「そりゃ。そうですけど。何で、こんなところを登るんですか」

直人は訝しがる。いつもはお墓を横目に見ながら走っているけれど、墓地の中に足を踏み入れるのは、あまり気はすすまない。

「心配しなくても、祟りなんか無いぞ。どうせ、俺もお前もいつかは入るんだから、早いうちから慣れていたほうがいいだろう。でも、ひよっとしたら、階段だけに、幽霊が出るかもしれない。アッハッハッ」荒木先輩が珍しくジョークを言って、笑った。

「そんな」と思いながら、今は夕方だけど、薄暗くなれば幽霊が出てもおかしくない雰囲気だ。

「どうして階段なんですか」

「いつも、山道や坂道じゃあ、頭も足も飽きるだろう。たまには、変わった練習をしないと。それに、同じことをしていても、力をつかないぞ。別の個所の筋力を鍛えれば、相乗効果で体全体が鍛えられ、山道も坂道ももっと速く走れるようになるんだ」

「そんなものですか？」

「そんなものだ。それに、次の大会もあるしな」

「次の大会？」

「そうだ。今度、こんぴらさんで石段マラソンがあるんだ。それに出場するんだ」

「先輩が、ですか？」

「そうだ。お前もだ」

「僕も、ですか？」

「そうだ」

「そんな話、聞いていませんよ」

「そうか。それなら、今、言った」いつもながら、強引な先輩だ。だが、その強引さのおかげで、楽しい目も苦しい目にも会ってきた。差し引きゼロか。先輩の言葉を借りれば、そんなものだ。

「その大会は、参加料が無料だし、Tシャツやお菓子も貰える。うどんか、アイスクリームかどちらかを無料で食べられるぞ。おまけに、温泉に入れるんだ。どうだ。いいだろう」荒木先輩がにやっと笑う。だが、いいだろうと言われても困る。小さい子じゃあるまいし、お菓子を貰って喜ぶ年齢じゃない。それに、お菓子を貰う前に、階段登りという大きなハードルがある。だが、反対はしない。行かないと言っても、無理やり連れていかれるだけだ。それに残って一人で練習

するのも面白くない。

「以上。説明は終わりだ。さあ。練習だ」荒木先輩が階段を駆け上り始めた。

「ちょっと、待ってください。まだ、話の続きが・・・」

「続きはあの階段の上に登ってからだ」荒木は振り向きもせずにもう十段以上を駆け登っている。直人も慌てて荒木先輩の後に続く。

階段は最初、勾配がゆるやかだったが、しばらくすると直登に変わった。一段一段の階段の段差はそんなに高くない。だけど、一段飛ばしで登るのには少し高い。それでも、身長が高く、股下が長い荒木先輩は平気で一段飛ばしで登っていく。スタートダッシュで遅れたことと、それ以降の登りのスピードの差で、荒木先輩の背中はどんどんと離れていく。最初は、こんな階段なんかたいしたことはない、とタカをくくっていた直人だが、次第に脚が重くなってきた。併せて、呼吸も荒くなる。

「さあ、もうちょっとだ」もう既にゴールしたのか、荒木先輩の声が上から聞こえる。しんどさで下ばかりを見ていた直人は顔を上げた。荒木先輩は仁王立ちだ。視線を足下に戻す。荒木先輩の声に励まされ、いや、脅され、一段、一段、後一段と、呟きながら、重力に抵抗し、脚を上げようとする直人。だが、脚は上がらない。鉛が脚に取り憑いたようだ。まさか、幽霊か。頭だけがカラ回りだ。心臓も拒絶反応している。いつでも爆発させてやろうかの勢いだ。頭の中が酸欠で真っ白になる前に、やっと黄色いランニングシューズのつま先が見えた。直人は背中を曲げ、膝に手をついたまま、ぜえぜえぜえと呼吸し続けた。酸素が足りない。酸素が足りない。周囲の酸素を全て吸収するかのよう息を吸う。

「まあ、一本目にしてはこんなもんかな。さあ、元の場所に戻るぞ」

「ええ。まだやるんですか」

「あたりまえだ。一本ぐらいやったところで鍛えられないぞ。反復こそ力だからな」そう言いながら、一段飛ばしで階段を下りていく荒木。

「あっ、そうそう。下りは慌てなくてもいいからな。へたにスピードを出すと転んだり、ねんざしたりするぞ」

確かに階段は登りよりも下りの方が怖い。コンクリートの階段はかなり老朽化し、角の部分は小石がむき出しになって崩れかかっている。そんなことも気にしないかのように、荒木先輩は軽快に下りていく。上から荒木先輩を見ると体をややはずに構え、足もやや斜めにして階段に着地している。タッタ、タッタ。タッタ、タッタ。リズムよく下りて行く。

慣れるより習えだ。習って、慣れろだ。直人は見よう見まねで荒木先輩の方法で階段を下りる。まっすぐ足先を向けると落ちていくような恐怖心が湧くが、足先をやや斜めにする、若干だが、そんな気持ちが和らぐ。いちに、いちに、自分でリズムを取る。うん。いい。これなら下りやすい。やっとスタート地点に到着した。

「さあ、いくぞ」荒木先輩がまた掛け登り始めた。

「もう、行くんですか。休憩はしないんですか」

「下りる時に休憩しただろう」後ろを振り向かずに荒木は登っていく。

「心臓は休めたけど、脚は休めてないですよ」すぐに言い返す。

「登りと下りでは使う筋肉は違うぞ」荒木先輩の声は上の方に遠ざかっていく。

「ちえ。自分勝手なんだから」直人は荒木先輩に続いて、しぶしぶ階段を再び登りはじめた。それが十回続いた。

「もう、だめです。脚が上がりません。それに足首を少し捻ったみたいですよ」直人は顔中汗だらけのまま、道路に座りこんだ。そんな直人の様子を上から視線で見下ろしながら、荒木先輩は平然と立っている。

「そうか。じゃあ、今日は勘弁してやる。そのまま待っていてくれ。俺は、後、十回登るからな。次からは二十回登るぞ」そう言い残して荒木先輩は階段を再び登り始めた。

直人は膝を抱えて体育座りのまま、先輩の練習が終わるのを待つ。心地よい風が山の上から吹いて来た。風は直人のほてった体をやさしく包み込んだ。直人は疲れ果てたものの練習をこれだけやったんだという達成感で心は満ち溢れていた。